

雲南省南部・ヴェトナム国境地域を訪ねて — 2009 年 11 月 —

前田栄三

京都大学学士山岳会

はじめに

今回の旅は主として紅河の南、ヴェトナム国境地域を目指した。まずは金平苗族瑶族タイ族自治県金河鎮・タイ族村、金平県金水河鎮・瑶族村を訪問。紅河左岸沿いを走り国境の町・河口瑶族自治県・河口鎮（ヴェトナム側は「ラオカイ（老街）」という）・壮族（チワン族）村、国家森林公园（原始森林）「花魚洞」を訪問。その他、民族文化生態村として石林県月湖村（彝族の支系、サニ族）、元陽県梯田鎮の棚田（哈尼（ハニ）族および他の民族村）、昆明市にある雲南省博物館・雲南民族村・雲南民族博物館、李家山博物館（青銅器、江川県）、紅河博物館（蒙自県）、中国科学院昆明植物研究所・植物園を視察する機会を得た。全行程を、再び雲南大学民族研究院・尹紹亭教授と行動を共にした。

当初、雲南省側から陸路ヴェトナムに入り、ディエンビエンフー及びその周辺地域のタイ族・モン族の村々を訪問しようとして企画・検討を進めた。残念ながら時節未だ熟せず、越境はもとより国境の山々に立つことも出来なかった。ディエンビエンフー攻略戦に象徴される第1次インドシナ戦争、ジュネーブ協定に端を発した抗米救国戦争（ヴェトナム戦争/第2次インドシナ戦争）、抗米救国戦争に勝利した直後のカンボジア侵攻、そして中越戦争…（第3次インドシナ戦争）、苛烈に過ぎる民族の歴史に一言の言葉もない。雲南側から陸路入国してディエンビエンフーの盆地に佇み、周辺の丘陵と中越国境線上の凄惨な戦跡、その痕跡を目の当たりにして往時を偲び、フランス領インドシナとりわけヴェトナム・トンキン地方の過酷な近代史に思いを馳せるのは、当分先のこととしなければならないのだろう。

旅程の概要（記録）

11月2日 10名全員、昆明に集合。

昆明連雲賓館泊

6名は成田発～上海経由、2名は関西空港から、1名は中部空港から上海経由、1名がバンコクから昆明に到着し、10名全員がホテルに集合した。

11月3日 雲南省博物館、雲南民族博物館、雲南少数民族村を訪問。

昆明連雲賓館泊

かの雲南のマツタケに初めて接し、その形と香りそして鍋料理を愉しんだ。雲南省の主要なマツタケ産地は、楚雄市などを中心とする楚雄彝族自治州と香格里拉を中心とする迪慶チベット族自治州、そして麗江周辺である。南華県と香格里拉県で採取したマツタケは、DNAの分子系統解析の結果、日本産・韓国産と同じ生物種であった。しかし遺伝的に微妙に異なる結果が示されている¹⁾という。

11月4日 昆明郊外の新市街区の建設状況を見ながら元陽県に向かう。

元陽県雲梯ホテル泊

昆明市の南60km、中国第2の水深を持つという撫仙湖湖畔を通り李家山（青銅器）博物館を訪問。博物館の入り口には「牛虎銅案」（写真1）のひと際大きなレプリカが聳えている。李家山遺跡から出土した青銅器は、春秋時代中後期から前漢時代初期までの大よそ500年に亘ると言われ、この虎に襲われた親牛が耐えて子牛を守ろうとする「牛虎銅案」は、滇国青銅器の逸品中の逸品とされている。老師によれば、「牛」は滇国を、「虎」は国王を、「子牛」は国民を表すという。「案」とは、古い時代には食物を運ぶお盆を指したと云う。高さ43cm、幅76cmと大きく、銅製なので重い。祭祀用に用いられたかもしれない。石畳の美しい陶器の町・建水を経由して紅河を南に渡る。元陽県の旧県城「新街鎮」着。棚田を視察する。



写真1 李家山博物館「牛虎銅案」



写真2 ハニ族レストランでの歓迎宴



地図1 金平苗族瑶族タイ族自治県・金水河鎮、河口瑶族自治県・河口鎮の位置

11月5日 元陽の棚田と哈尼（ハニ）族の村を視察。 元陽県雲梯ホテル泊

数箇所まで棚田を観察。棚田を眼下に見下ろす車道沿いに観光客専用の歩道と展望台が新設され、岩場の上の絶好の写真スポットに至る山道も石畳の歩道とすべく工事中であった。石の運搬に小柄な中高年女性が列をなして従事している。観光開発が著しいが、地元の村々にとって開発の恩恵を直接享受できない点が、問題という。

元陽県が位置する哀牢山には7つの民族が暮らしている。標高144～600mの地帯には主にタイ族、600～1000mにはチワン族、1000～1400mにはイ族、1400～2000mにはハニ族、2000m以上には主として苗族瑶族が住んでいる。漢族は殆ど県城や鎮、或いは道路沿いに住んでいる。

ハニ族は長年、棚田で稲作を営み暮してきた。棚田の稲作文化は、衣食住・農作業はもとより祭祀儀礼、宗教や信仰、思想など、生活のあらゆる面にしっかりと根付いている。しかしながら建国以来の時代の荒波は容赦なくハニ族の社会をも襲い、漢族文化を中心とする外来文化の流入と次代を担うべき若者達の都会への流出となって、ハニ族の伝統的棚田文化の継承に対する本質的な問題として顕在化している。

11月6日 元陽県を出発、金平苗族瑶族タイ族自治県に向かう。 金平県西隆ホテル泊

紅河の北側を走行し、金平県に向かうため再び紅河を南へ渡る。その橋の南側のたもとに常設の公安警察の検問所があり、パスポートのチェックを受ける。ヴェトナム国境の近いことを実感する。いつ簡易舗装されたか判らぬ、然も到底2車線とも思えぬ狭いバス道路が、紅河に注ぐ支流に沿って山の中腹を縫うように南行している。支流の向こう側、延々と続く急斜面の棚田を車窓から視察し、営々と繰り返された人々の営みに驚嘆しつつ南下して、金平県に向かう。今では斜度25度以上の急傾斜地は、棚田耕作を禁止して植林するという（退耕還林）。

西方の山並に高速道路建設の工事が進む様子が見える。2年後の2011年には金平県の南、ヴェトナム国境付近に達するという。

金平県、哈尼（ハニ）族レストランで歓迎宴。タイ族の王江兵さん（金平自治県人大関係者）、苗族の楊照芝女史（金平自治県人大常委会副主任）

が同席する。宴たけなわの頃合いに、給仕をしていた若い女性達が歌姫となって艶のある声で歌い出す。と、一人の女性が一人の客人の口に肴を含ませ、次いで白酒の入った小さな杯を口にあてがう。躊躇していると一段と歌唱の声を張り上げ、飲み干すよう促す。これが客人全員に繰り返された。歓迎の証し（写真2）なのだという。

11月7日 金平周辺の瑶（ヤオ）族の村・タイ族の村を回る。 金平県西隆ホテル泊

金平県を南下、金水河を一望に見降ろす山上の瑶（ヤオ）族の白石岩村を訪問。村長の李文祥さんから説明を受ける。3部落がシーサンパンナからこの地に移住して100年、今では50家族・200人程が居住しているという。

村長の説明内容について、同行の濱本満君の「見聞記²⁾」から抜粋して『』内に示す。

『主に、陸稲、粟、キャッサバ、大豆で生計をたてていたが、1982年からバナナ、1987年からゴムの樹を栽培している。ゴムの樹は、8年ほどで成木となって樹液の抽出が可能となり、12～15年をピークに25～30年で樹液は減少する。ゴムの樹栽培から約12年、日照を避けるため3:00am～6:00amの早朝、樹液が集められ、庭先に白い塊が無造作に置かれていた。

耕地は、国家と18歳以上を成員とする世帯が期間70年の契約を結んだ租借地で、その契約面積は一人当たり50～60ム（1ム＝1haの1/15、667m²に相当）、その利用方法は個人に委ねられている。ゴムとキャッサバの採算性が高く、村長は、ゴムの植林を増やしていきたいとのことであった。又、租借地は、賃貸借に供されて経営規模を拡大する人もいるそうである。しかし、ゴム栽培は、大量の水と、カイガラムシ等の害虫駆除、年2回（3、8月）の施肥（化学・有機肥料）、早朝労働（1人500～600本の樹を管理）が必要で、加えて、天然ゴムは、市場の影響を受ける投機性の高い商品のため、市場価格・費用・労働に配慮して経営判断を行なわなければならない難しさがあるとのことであった。』

家々は明るい外壁で清潔な感じがし、公民館が新築中だった。国境地域の少数民族に対する手厚い施策を実感する。

金水河出入国管理事務所（標高約300m）を視察。



写真3 中国側から見るヴェトナム出入国管理事務所



写真5 英雄10姉妹



写真4 山上の瑶族村から見る河川敷



写真6 ヴェトナムの街「ラオカイ（老街）」と滇越鉄道

対岸はヴェトナム、同じように国旗を翻した管理事務所（写真3）がある。この地域も中越戦争の最前線の一つ。中国人民解放軍に800人の戦死者が出たといい、金平県に護送され郊外に埋葬されたという。

金水河鎮白石岩村に向かう山腹には今も地雷が残されたままといい、髑髏マークの警告標識が3～50m程の間隔を置いて立つ。ヴェトナム地方軍の戦闘用ヘリコプターが飛来し駐留したという広大な河川敷（写真4）はバナナ園となり、河原では今、正に出荷の真っ最中。活気に満ち満ちていた。金水河女子民兵班として参戦した10代の娘たちは「英雄10姉妹」（写真5）として表彰され、全員が河岸のレストランで働いている。金平県民族事務局長／侯自祥さん、金平県人大民工委主任

／楊自有さんが我々に同行してくれた。

11月8日 金平を出発し、河口瑶族自治县へ。

河口国際ホテル泊

再び紅河に架かる橋のたもとに戻り公安検査所でチェックを受け、橋を渡って蛮耗鎮に入る。街中は狭い道路に昼時が重なり、頭から突っ込む車で身動きが取れない。ひとたび高速道路（新河高速）に入ると、走行する車は全く無く、延々と続く「ゴム園」と「バナナ園」を見遣りながら1時間20分程して河口瑶族自治县河口鎮のホテルに到着した。河口県民族事務局長／王家強さんの案内で国境の街「河口」を散策する。商店や土産物店がひしめく一角は、夜になると様相は一変し、特に2階は妖艶な世界と化すという。国境の街の夜の風情がここにもあるようだ。

11月9日 河口県周辺の「原始森林」を視察、集落を回る。 河口国際ホテル泊

河口鎮から北上、南溪鎮の入口（三叉路）に公安検査所がありパスポートチェックを受ける。国家森林公园「花魚洞」を視察する。原始林の面影は勿論あるが、いかんせん規模が小さい。瑤族村に不幸があり、予定を変更して壮（チワン）族の村を訪問する。村長の案内で村内を回る。村の集會場で、村では珍しいというご馳走が食卓に並べられ、馬多依下寨小組長／黄保明さんや村の幹部、厨房の女性達を交えて賑やかな昼食会となった。京大・神戸大山岳部関係者が4人いたので「安曇節」を個々に披露したところ、これがすこぶる好評で、座がいっぺんに和んだ。遠巻きにしていた子供達も大勢寄ってきた。

チワン族のかかなりの部分は、明初に統治権力が敢行した貴州遠征を始めとする漢民族の貴州への進出が契機となって、広西に來住したことが知られている。広西チワンは文字を持つが、雲南チワンは文字を持たない。雲南チワンは、戦争で雲南に來てそのままこの地に残留したという。

夜は、紅河とその支流を挟んで眼下にヴェトナムの街「老街」（写真6）が見渡せる高台のレストランで夕食。昆明とハノイを結ぶ滇越鉄道が足下を通る。河口県委統戦部副部長／王国珍さん、河口県南溪鎮主席／陶光河さん、河口県南溪鎮人民政府付／顧維志さんが同席し、賑やかな宴会となった。皆さん声に艶があり声量も豊かだ。

11月10日 蒙自へ移動。 紅河官房大酒店泊

河口発、「新河」高速道路を走行して蒙自県に向かう。紅河に沿って見事なゴム園が続いている。ユーカリは1本も無い。文字通り『赤い大地』が続く。

天然ゴムの生産はほぼアジアに集中している。国別にみると、タイ（33%）・インドネシア（24%）・マレーシア（14%）の3カ国で70%を占める（国別生ゴム生産割合（2004年））。次いでインド（9%）・中国（6%）となっている。中国では海南省・雲南省・広東省が大生産地である。世界の天然ゴムの消費量は年々増加し続けており、1984年から2004年で約2倍になった。近年著しいのは中国の消費増大で、2001年にアメリカを抜いて世界最大の消費国となっている。中国の消費が増えている背景には、自動車生産の急激な増加、即ち自

動車用タイヤの原料としての需要による。

紅河哈尼（ハニ）族彝族自治州の州都・蒙自は、新規に立地した美しく区画整理された大きな街で、官公庁舎も今様の中国的で立派な建造物である。ハニ族出身の州長の手腕によるところが大きいという。高速を降りて蒙自県に入ると「ザクロ」や「琵琶」の露店が並ぶ。

紅河州博物館館長／李克山さん、副館長／楊婉琳さん以下、紅河州文化局歴史文物課長／龍海さん、2008年の説明員／李朝春さん、博物館社教部主任／李志剛さん、博物館弁公室／陳敏さん・龍南希さんと昼餐会。大きな円形テーブルを全員で囲む。楊さん以下女性陣の歓迎の歌唱をいただく。佐久間団員が豊かな声量で「黒田節」を返歌する。夜は郊外の哈尼（ハニ）族レストランで夕食。

11月11日 蒙自発、弥勒を経て瀘西県へ。

瀘西県虎城賓館泊

紅河南部及び紅河河畔に見ることの無かったユーカリの植樹が、次第に眼に入り始め、いつしか色濃くなっていった日であった。蒙自県の北西25kmの鶏街鎮を過ぎて北上する頃から眼につくようになり、瀘西郊外はユーカリ一色と言って過言でない様相を呈していた。

弥勒の手前で突然渋滞が始まり、上下線とも動かなくなった。原因は無理な追い越しをかけた大型トレーラー同士の衝突。大型車2台が側溝に落ちて道をふさぎ、一方の車線の車両も損傷して立ち往生したためである。3時間程して、駆けつけたレッカー車により事故車を取り除き、渋滞は解消した。一般幹線道路では、十分予測される事態である。特に大型車両の追い越し運転は乱暴で危険極まりない。

瀘西県文化体育局副局長／王敏華さん、瀘西県文物管理所／饒強さんを交えて火鍋料理店で夕食。

11月12日 阿盧洞を観光、彝族の城子村を訪問。

瀘西県虎城賓館泊

城子村は道路沿いに街並があるが、里山の斜面にもビッシリと張り付いたように住まいが広がっている。村の入り口には、よろずや（商店）や小型の農作業用車両による行商の他、製粉所などもあり、生活の一端が垣間見られた。

石畳の狭い道を、トウモロコシの枯れ草（飼料）を積んだ何台もの牛車が、ゆっくり歩みを進める。個々の家は外敵に備えるため、緊急時は戸外に出

ることなく隣家に移ることができるよう村全体の家々が連絡通路を共有している。高所に位置する家の屋上に上ってみると、眼下に家々が連なり細い通路が縦横に走り壮観である。この屋上は作業場だった。

丁度、主食のトウモロコシを収穫したところだったので、庭や屋上はトウモロコシで一杯だった。山の上にお寺（靈威寺）があり、そこから眺めると幹線道路を挟んだ反対側の里山にも同様の集落を見ることが出来た。この寺は、明代の昂土師府遺址という。この一帯は将来ダムで堰き止められ、水に浮かぶ集落として観光地化する計画があるという。夕食は火鍋料理（石鍋）。

**11月13日 大諾黒彝族の「文化生態村」を視察、
「石林」を訪問。 昆明ホテル泊**

黒彝族の月湖村村内は小型車がやっとすれ違えるくらいの狭い道が縦横に走るも、対向車はなかった。黒彝族文化生態村の博物館は平屋建てで小学校の校庭の隅に立地している。簡素ながら校舎と融合した落ち着いた佇まいであった。博物館員の説明によれば、この村は明の時代に出来て600年以上の歴史があり、現在は392世帯1495人が暮らしているという。館内に展示されている写真・生活用品その他に関して詳細な説明を受けた。昆明に戻った夜は、前年に続き再び少数民族の踊りを舞う舞踊家・楊麗萍（ヤンリーピン）の舞台を観賞した。

11月14日 昆明市内観光、中国科学院昆明植物研究所植物園を訪問。 昆明ホテル泊

植物研究所の龍波さんの案内で園内を視察。彼女は今年博士課程を修了し、同研究所に奉職したばかりの生命科学部門の研究者である。

11月15日 帰国。

9人が早朝に帰国する中、私のみ午後便での移動となったため、老師と3人の通訳者そして河口県瑤山郷文化站／鄧国群さん、河口県老苑寨郷文化站／盤春華さんを交えて昼食を一緒にする。

国境の街、金平県・金水河鎮に佇んで想う、 近代ヴェトナム（トンキン地方）の歴史

「太平の眠りをさます上喜撰、たった四はいで夜も寝られず」！ 1853年、浦賀沖に來航したアメリカ・ペリー艦隊である。

ヴェトナムの歴史は、1858年8月31日、ダナ

ン軍港に進入してきたフランス軍艦の砲声1発によって暗転する³⁾。フランスの圧倒的な軍勢力（砲艦と火力）によってヴェトナムは南部地方（コーチナ）、中部地方（アンナン）については北部（トンキン）のハノイまで占領され、各地の激しい抵抗もむなしく、グエン朝の皇帝までもアフリカ・アルジェリアに流刑となるなど、一世紀にわたる屈辱的な植民地時代を迎えることになった。

ヴェトナムは、第2次世界大戦中の日本軍の仏印進駐（1940年9月北部、1941年7月南部進駐）に伴う「日仏両国からの2重のくびき」（日本・フランス共同支配期）を受ける中、日本軍によるフランス現地軍の武装解除（1945年3月9～10日）、そして日本の敗戦（同年8月15日）を経て、ハノイで独立を宣言（同年9月2日）した。しかしフランスは再びインドシナに復帰し、ヴェトナムはその支配下に置かれた。1946年に始まった抗仏戦争は、1954年5月7日、ディエンビエンフーでフランス軍が降伏（第1次インドシナ戦争）して終わった。1954年7月20日のジュネーブ休戦協定調印によって、ヴェトナムは北緯17度線で暫定的に南北に分断され、南北統一政府を樹立するための総選挙を1956年までに実施することとなった。その後、調印に参加しなかったアメリカ・南ヴェトナム国との間で抗米救国戦争を戦い（第2次インドシナ戦争）、1975年4月に北ヴェトナム＆南ヴェトナム民族解放戦線により南北統一が実現する。

1975年4月30日、北ヴェトナム正規軍の戦車が南ヴェトナム政府の大統領官邸正門を押し破り邸内に侵入したテレビ映像が、記憶に新しい。軍用機が1機、官邸上空に飛来した映像の記憶も鮮明に残っている。

第3次インドシナ戦争は、1978年12月25日のヴェトナム正規軍（約10万人）によるカンボジア侵攻から始まる⁴⁾。1979年1月7日、プノンペンを占領。ポル・ポト政権は倒れ、2日後の1月10日にはカンプチア人民共和国が成立した。中ソ対立の深刻化、米中国交正常化（1972年）、ヴェトナムと中国の亀裂、国境問題に見る歴史的経緯と現実など、この間の時代的背景は極めて複雑である⁶⁾。1975年4月17日にプノンペンに入り政権を樹立したクメール・ルージュ（ポルポト政権）は、5月に入るとヴェトナム国境を越えて攻

撃してきたという。カンボジア内戦の一方の当事者クメール・ルージュは中国と親交が厚く、ヴェトナム共産党との確執は根深い⁶⁾。

1979年2月、中国は米国と日本に対し「ヴェトナムを懲罰する」と表明し、同2月17日、中国はヴェトナム国境全域に亘って、3個軍団約13万人が戦車を先頭に圧倒的な海戦術でヴェトナム陣地（26地点）に殺到した。中越戦争である。

中国軍は20日にラオカイ（老街）、27日にカオバンを占領し、3月2日にランソン（諒山/中国側の国境の街が「鎮南関」である。）に入った。

中国はランソンを占領すると直ちに對ヴェトナム戦の勝利を宣言、3月18日には国境全域から完全に撤退した。ヴェトナム地方軍を相手に戦った中国軍の損害は甚大で、戦場は悲惨そのものだったと言う。ヴェトナム兵は語る⁴⁾。

「中国兵の携行武器は極端に少なく、10人の兵士に小銃が2丁、あとは手ぶらで戦場に来て、背後から指揮官が前進を命令する。素手の兵士たちは地雷原に入ってくる。当然のように犠牲者が出る。これにはびっくりした。前進を拒否した兵士は指揮官に射殺された。」

「撃っても撃っても中国兵は潮のように押し寄せてきた。銃身は焼け弾薬も無くなって、撤退した。高地陣地に残ったものは切り刻まれた。」

その当時（サイゴン陥落の前後）、我が国の世の中の動きはどうであったか！

1950年代半ば以降の高度経済成長の進展と公害の激化、更に円高に第1次石油危機（1973年）が加わり、産業界は正に危機的な状況・死活をかけた激動の時代を迎えていたと言って過言でない。

具体的には、1970年（昭和45年）の「公害国会」以来の各種規制強化に伴う公害防止（設備）投資の増大、1971年（昭和46年）の為替レートの変化に伴う円高（1ドル360円から305円、1978年には240円から180円へと円高の進行⁵⁾）、1973年（昭和48年秋）のオイルショックによる原油コストの高騰（約4倍）という危機的な状況を迎えていた。幸いなことに官民挙げての努力、経営の効率化と技術開発が相俟って、1980年代にかけてこうした難局を乗り越えることが出来た。「厳しい産業公害規制と経済成長を両立させた」として、国際

的にも高い評価を得た。

1971年（昭和46年）に環境庁が設置された。1974年（昭和49年）、大気汚染の総量規制が法制化され、硫黄酸化物・窒素酸化物に適用された。自動車排気ガス規制は、マスキー基準の53年基準を達成したことにより国際競争力が高まり、日米間の貿易摩擦を生じた事は記憶に新しい。

日本の石油産業の現場では……！

サイゴンが陥落する4ヶ月ほど前の1974年12月18日、岡山県水島コンビナートのA製油所で、重油タンク破損による大量の油流出事故が発生した。この事故が契機となって石油コンビナートの総合防災を目的とする石油コンビナート等災害防止法が施行された。

サイゴンが陥落した1975年は、ワシントン条約・ラマサル条約が発効した年である。「石油備蓄法」^{註1)}が制定された年でもある。

1976年4月8日、私の勤務する水島コンビナートのB製油所で、重油直接脱硫装置の爆発火災事故が発生した。高圧ガス取締法（当時）の規制強化の端緒ともなった石油プラントの事故である。

1978年6月12日の宮城沖地震では石油タンクが破損し、消防法の指導強化が行われた。また、東海地震発生の恐れが社会問題化し、1978年12月に大規模地震対策特別措置法が施行され、耐震設計基準が法制化された。1978年は、アラビヤ湾から英国に向けて航行中のリベリア船籍のタンカー・アモコ カディス号がフランス・ブルターニュ沖で荒天のため座礁し、積荷の原油26万kl全量が流出するという未曾有の原油流出事故が発生した年でもある。この年、第2次石油危機が発生した。正に多事多難な時節であった。

ヴェトナムの「独立宣言」—200万人の餓死事件—

ヴェトナムの人なら誰もが読むであろう「ヴェトナム民主共和国独立宣言」に、それはあった。ヴェトナムの独立が宣言されたのは1945年9月2日である。ホー・チ・ミンが執筆した「独立宣言」を、ハノイのパ・ディン広場で行われた独立記念式典国民大会の場で、ホー・チ・ミン自ら読み上げた。その独立宣言の中に以下の記述がある³⁾。

「1940年秋、日本ファシストがインドシナ領土を侵略して、連合国と戦うための新しい基地を

築こうとした時、フランス帝国主義者はたちまち膝を屈して、我が国を彼らに譲り渡した。その日からわが人民は、フランスと日本の二重のくびきに繋がれた。彼らの苦難と悲惨は増大した。その結果、昨年从去年の末から今年の初めまでに、クアンチ省からヴェトナム北部にかけて 200 万人以上の同胞が餓死した。3 月 9 日、フランス軍は日本によって武装解除された。フランス植民地主義者のある者は逃げ去り、他は降伏した。それは彼らには我々を「保護する」能力が無いこと、そればかりか、僅か 5 年間に彼らは 2 度までも我が国を日本人に売り渡したことを示すものであった。」

餓死者の数については、「約 40 万人」と言うヴェトナム人³⁾、「飢饉の被害は、どんなに少なく見ても数 10 万、恐らくは 100 万を超えることは、ほぼ間違い無いように思われる。…まだ多くの調査が必要な状況であることを、強調しておいたほうがよいだろう。」との日本人の著作⁶⁾もある。また、当時北部仏印に進駐した元兵士の証言なども見ることが出来る(参考資料(2))。

被害の実数は兎も角、「餓死者 200 万人」という数字は、この飢饉の被害が激甚であったことを象徴するものとして、長い間ヴェトナムの人々の間で信じられてきた数字であるという。そして今後ともヴェトナムの全ての人々に共有されていくことは、間違い無い。

200 万人という数字で思い出すのはビアフラである。私はアフリカを訪問したことは未だ無い。ここでひと言付言してかの地を偲び、密林の奥に逝った無数の方々に哀悼の気持ちを捧げたいと思う。

1970 年 1 月 12 日、ナイジェリア内戦の一方の当事者ビアフラ共和国(イボ族)は崩壊した。1967 年 5 月 30 日、凄惨な部族抗争に続くビアフラ独立宣言。同年 7 月 6 日、ナイジェリア連邦政府がビアフラへ宣戦布告。2 年半の内戦(ビアフラ独立戦争)で、ビアフラ全体の死者は 200 万人という⁷⁾。英・露の強力な支援を受け戦力を急速に増強した連邦軍、武器弾薬が枯渇し、四方を封鎖され、糧道と武器の供給を断たれ、赤十字の救援機すらも飛べず、飢餓に追い込まれ、世界に極度の窮状を訴える術もなく壊滅していった民族。教育水準も高く公用語(英語!)に習熟し、政治・

経済分野に人材を多数輩出したイボ族の悲劇、惨劇である。

ディエンビエンフーの戦い(第 1 次インドシナ戦争終結)

ディエンビエンフーは「辺境府」の意味で、ヴェトナム西北部でラオス国境に接するディエンビエン省(人口約 44 万人)の省都である。ハノイから西へ約 250km の地点にあり、1841 年に西方辺境防衛と開発の拠点として設置した奠邊府(ヴェトナム語:Điện Biên Phủ)に由来している。

メコン水系のゾム川がなす山間盆地(標高約 500m)にあり、その盆地は長さ 20 キロメートル、幅 6 キロメートルの、南北に細長いハート型をしている。南シナ海に注ぐダー河、マー河上流部にも近接する為、雲南省、ルアンプラバーン(ラオスの旧首都)、ハノイからの交通の要衝として栄えた⁸⁾。ラオス北部や中国雲南省と国境を接する西北ベトナムは、多民族・多言語混交地域として知られている。その複雑な民族分布は、盆地、山腹、高地という地勢に応じて理解できるという。ディエンビエンは、人口の 75% を占める黒タイ族とモン(苗)族の世界である。黒タイ族は盆地の中心部の平地に住み、モン族は周囲の山に美しい家屋を建てて住んでいる⁴⁾。

黒タイの伝承では、始祖降臨の地ムアン・ロー(現ヴェトナム・イエンバイ省ギアロ)を去って各地を平らげた英雄ラン・チュアンが、最終的に安住したのがムアン・テーン(ディエンビエン)である。ラン・チュアン居城に因む「ラン・チュアンの丘」こそ、第 1 次インドシナ戦争(1946-1954)最大の「ディエンビエンフーの戦い」でフランス植民地軍が完全に降伏した要塞「A1 の丘」である⁸⁾。ヴェトナムの多数民族キン族の伝統的居住地域から遠く離れ、黒タイ族やモン(苗)族が多数を占めるディエンビエンフーでの勝利は、ヴェトナム諸民族の団結を強く世界に印象づけた。ヴォ・グエン・ザップ将軍は言う⁹⁾。

「ディエンビエンフーの戦いは、米国が戦費の 80% を調達した。ディエンビエンフーの失敗は、フランスと米国の失敗だったのだ。」

「ヴェトナム人民が勝利を勝ち得たのは、彼らの解放戦争が人民の戦争だったからである。」

結び

バンコクへ或いは成田に向かうタイ国際航空の旅客機は、かつては米軍の一大軍事基地があったダナン上空を飛行する。眼下に見える海岸線はいつも波静かである。高度1万メートルの上空からはそのように映る。ダナン上空を通過するたびに思う。「稲の国」とも云われる貧しい農業国ヴェトナムは、どうしてディエンビエンフーでフランスに勝ち、抗米救国戦争でアメリカに勝つことが出来たのだろうか！ 1997年6月と8月、ホーチミン（旧サイゴン）市を訪問した際にホーチミン記念館で見たバック・ホの穏やかな笑顔、優しい眼差しは一体どこからくるのだろうか！

ホーチミン市の郊外70kmのところにある、クチの地下トンネルに入る機会があった。抗米救国戦争に於いて「鉄の三角地帯」と呼ばれ難攻不落を誇った南ヴェトナム解放民族戦線の拠点である。手掘りのトンネルは、総延長200kmにも及ぶという。ディエンビエンの周囲の山々に大量の大砲を、武器弾薬を、そして食料を担ぎあげた民衆（少数民族）の力、クチでトンネルを掘り抗米救国のゲリラ戦を戦った民衆の力、その力の源泉は何なんだろう！

ダナン上空を通過する回数も相当な数となった。兎に角、ディエンビエンフーそして黒タイ族の町や村を訪問し、ヴェトナム社会構造の基礎をなすという「家族制度」、そして「むら社会/村落自治の形態」に触れるところから始めてみたいと思っている。

若い皆さんには、日本がヴェトナムに介在した1940年代前半の時期に北部中心に未曾有の大飢饉が発生したこと、その飢饉により「1944年末から1945年初めまでに200万人以上の餓死者が出た」と「独立宣言」の中に記述されていることを、認識しておいてほしい。然もその「独立宣言」は、未来永劫全てのヴェトナム国民から敬愛されて止まないであろうバック・ホの執筆によるものであり、独立式典でバック・ホ自ら読み上げたものであることに思いを至らしめてほしい、と思う。

謝辞

旅の様子を記録するにあたり、同行の佐久間忠雄氏による詳細な「時間記録」、金子稔氏の「写真記録」、渡邊裕之氏の紀行文「樹木医の見た雲

南の暮らし」（第14回雲南懇話会資料）、そして濱本満氏の「見聞記」が多いに役立った。記して感謝したい。

註

- 1) 1973年に勃発した第一次石油危機の後、世界各国で緊急時対策が進められる中で、1974年11月には先進石油消費国によりIEA（国際エネルギー機関）が設立され、90日分の石油備蓄義務を含む石油緊急融通制度が創設された。我が国では、1973年12月に、緊急時における石油需給や価格に関する緊急時二法（「国民生活安定緊急措置法」及び「石油需給適正化法」）が施行されるとともに、1975年にはIEAの石油備蓄義務に基づいて「石油備蓄法」が制定され、翌1976年4月に施行された。

参考文献

- 1) 山中勝次, 2008年「マツタケはどこからきたのか—東アジアマツタケ回廊を行く—」社団法人大日本山林会発行「山林」2008年10月号, p31
- 2) 濱本 満, 「雲南省紅河下流域の少数民族を訪ねて（見聞記）」雲南懇話会Home Page「フィールドワーク」2009年11月
- 3) 小倉貞男, 1997年「物語ヴェトナムの歴史」中公新書, p228, p346, p349
- 4) 小倉貞男, 1992年「ヴェトナム戦争全史」岩波書店, p268～272
- 5) 日本銀行, 「金融経済統計月報」日銀Home Page
- 6) 古田元夫, 1995年「ベトナムの世界史」東京大学出版会, p121～126
- 7) 伊藤正孝, 1984年「ビアフラ 飢餓で亡んだ国」講談社文庫, p48～55, p255
- 8) 檜永真佐夫, 「西北ヴェトナムの盆地世界」雲南懇話会Home Page「第12回雲南懇話会」2009年6月
- 9) ヴォ・グエン・ザップ, 2002年「人民の戦争・人民の軍隊」中公文庫
- 10) 東 大作, 2000年「我々はなぜ戦争をしたのか—米国・ヴェトナム 敵との対話—」岩波書店

参考資料

(1)2009 年11 月の雲南Fieldwork 日程

1. 参加者 (10 名、敬称略)

日本側：団長：岡 邦俊（弁護士）、副団長：本郷一雄（笹ヶ峰会）、Coordinator：前田 栄三（AACK）、亀田 義憲、金子 稔、神山 巍、佐久間忠夫、濱本 満（笹ヶ峰会）、原田 聡、渡邊裕之。

中国側：雲南大学民族研究院 尹紹亭 教授、雲南大学民族研究院 烏尼尔（博士研究生）、雲南大学民族研究院 曹津永（修士）、雲南師範大学OG 林 玲（学士）

2. 日程

- 11 月2 日 昆明着、昆明連雲ホテル宿泊
11 月3 日 昆明市内観光、博物館等を見学。
昆明連雲ホテル宿泊
11 月4 日 元陽に向かう。撫仙湖、建水を経由、元陽県着、棚田視察。 元陽県雲梯ホテル宿泊
11 月5 日 元陽台地・棚田とハニ族の村を視察。
元陽県雲梯ホテル宿泊
11 月6 日 元陽を出発、棚田を視察し金平に向かう。
金平県西隆ホテル宿泊
11 月7 日 金平周辺のタイ族の村・集落を回る。
金平県西隆ホテル宿泊
11 月8 日 金平を出発し、河口県へ。
河口国際ホテル宿泊
11 月9 日 河口県周辺地区、瑤族村集落を回る。
河口国際ホテル宿泊
11 月10 日 河口発、「原始森林」を視察。
蒙自県蒙自官房ホテル宿泊
11 月11 日 紅河州民族博物館を見学、それから瀘西県へ。
瀘西県虎城ホテル宿泊
11 月12 日 阿盧洞を観光、彝族の城子村を訪問。
瀘西県虎城ホテル宿泊
11 月13 日 石林に寄り昆明へ。途中で大諾黒彝族の「文化生態村」を見学。 昆明ホテル宿泊
11 月14 日 昆明市内観光、中国科学院昆明植物研究所植物園を訪問。 昆明ホテル宿泊
11 月15 日 帰国。

(2)ヴェトナム「200 万人餓死事件」に関する資料

- ・ 中山 二郎、「新聞報道の虚構—ハノイ発共同電に異議あり—」月刊誌「正論」（1995 年 10 月号）
- ・ 高山 正之、1999 年 7 月 17 日付「産経新聞記事「異見自在」—学識経験者って何者だろう—」

・ 2005 年 4 月 14 日（木）付「しんぶん赤旗記事」—日本占領下、ベトナムで 200 万人が餓死—

以上

Summary

Visiting Minorities Villages (Thai, Yao, Chiwan) in the Southern Part of Yunnan, China

Eizo Maeda

The Academic Alpine Club of Kyoto

In the autumn season of 2009, we visited Yunnan Province of China for 2 weeks.

During this time, we visited the southern part of Honghe (Red river), such as the Thai Village, Yao Village, Chiwan Village and the Southeast side of Kunming, Yuehu Yi Ethnic Cultural and Ecological Village.

And also we visited the Vietnam-China Border Gate at the Jinshuihe (named Ma Lu Thang in Vietnam) and Hekou (named Lao Cai in Vietnam). Standing at the Jinping and the Jinshuihe, I have been reflecting on the Modern history of the North-West part of Vietnam.

We will never forget a part of The Vietnam Declaration of Independence, as follows.

In the autumn of 1940, when the Japanese fascists violated Indochina's territory to establish new bases in their fight against the Allies, the French imperialists went down on their bended knees and handed over our country to them. Thus, from that date, our people were subjected to the double yoke of the French and the Japanese. Their sufferings and miseries increased. The result was that, from the end of last year to the beginning of this year, from Quảng Tri Province to the North of Viet-Nam, more than two million of our fellow citizens died from starvation.

(WIKIPEDIA)